



Title	後進・挑戦・躍動
Author(s)	永浜, 明子
Citation	臨床哲学. 2016, 17, p. 184-188
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/57571
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

後進・挑戦・躍動

永浜 明子

はじめに

2014年夏の北海道施設訪問に続く訪問の地は、約2,300キロ離れた沖縄であった。昨年の北海道浦河町にある社会福祉法人「浦河べてるの家」を訪問した後、様々なことを考えた浜渦先生率いるメンバーは、別の地も訪問してみようということになった。

沖縄は、私が2004年から2006年までの2年半を過ごした地である。この2年半の間に障がいのある人たち、その人たちと共に生きる、生きようとする人たちと多く接してきた。教育委員会を通じて接した家族、大学生たちを創設した障がいのある子のためのサークル、福祉関係の仕事に携わる人たちとの共同プロジェクトなどから、障がいのある人たちとその家族、家族に関わりのある人たちを間近で見てきた。その中で感じていたことが二つある。一つ目は、沖縄という地の「後進性」である。二つ目は、後進だからこそ生まれるとも言える「挑戦」あるいは「斬新性」である。

今回の訪問では、このように感じた10年以上も前の沖縄が今もそうであるのか考えたというのが私の最大の関心事であった。本稿では、障がいのある方に関わる事業や企業側に着目し、この2つの視点について10年前と比較すると共に今回新たに加わった三つ目となる「躍動感」について報告したい。

後進性

2004年4月に沖縄県立看護大学に赴任した後、障がい児・者福祉に関わる人たちと関わりを持つようになり、教育や福祉の後進性を感じた。小学校就学に際し、無条件に地域の学校を選択するわけではなく、就学指導委員会の助言を基に最終的な就学先を決定するという形を取っていた。人権問題に関する取組が盛んな大阪で生まれ育った私にとっては衝撃的な出来事であった。詳細は省くが、この就学プロセスに異議を唱える保護者は多く、学校や教育委員会と障がいのある子を持つ保護者との関係は必ずしも良好であったとは言

えない。また、学校外においても、十分な行政的マンパワーが乏しく、障がいのある子を持つ母親の多くは仕事を続けられず、家に留まることを余儀なくされていた。行政は予算や人材不足という問題を抱えながらの対応であったが、保護者、特に母親たちは「親の会」での検討を繰り返し、子どもの「生きる権利」「教育を受ける権利」を勝ち取るという戦闘モードであった。この光景は、私が小学生の頃に身近で起こっていたことを考えると、沖縄で実体験したより 20 年近く前のことであり、沖縄の遅れを感じずにはいられなかった。

約 10 年の時を経た今回の沖縄では、「後進性」はどこにも見られなかった。2016 年 4 月から施行される障害者差別禁止法に対する取組が何年も前から検討され、準備が進められていた。訪問先で出会った方たちの意識は高く、行政と反発する部分も持ちながら、行政と手を携えながら前進しようとする姿がそこにあった。「役所も予算や人材が足りないから、こっちの様子や意見も聞きながら目をつぶらないとやっていけない部分もあるから」と A さんが笑った姿が印象的であった。予算・人材の不足は今も解消はされていない（どの都道府県、市町村もそうであるが）が、だからこそ、行政に対する一方的な批判で臨むのではなく、行政も現場も知恵を出し合っていきましょうよという思いが窺えた。後進性を感じない（後進的でなくなる）背景には、関係性のあり様が大きいのではないだろうか。すなわち、行政と現場の距離の近さ、組織と組織ではなく、人と人との関係を結ぶことがその要因ではないかと思う。

挑戦

前述したように、障がいのある子を持つ母親たちが活動していたように、行政や学校関係者、特に私が深く関わりを持っていた人たちの動きも活発であった。その中でよく耳にした言葉が「追いつこうとしない」である。「進んでいる地域の視察に行き、ヒントはもらおう。しかし、追いつこうとはしない。その先を行く」という意味である。地域ごとに特色があり、その地域でできていることが沖縄でできること、あるいは適しているとは限らず、ヒントをもらいながら沖縄の地域性を生かした取組をすることが重要であるという考え方を多くの人が持っていた。文字にすると当たり前のように感じられるが、このような視点を常に持ちながら先に進もうとするのはたやすいことではない。当時、一緒に仕事をしていた 50 歳を過ぎた校長先生、30 歳前半で東京から石垣島へリターンしてきた若者

が同じような感覚を持っていることに不思議さを覚えたこともあった。彼らから聞く「遅れているのだから、何をするにも挑戦」という言葉に対し、「無謀では？丁寧に進む方が……」と返答したことを覚えているが、今考えれば、彼らの志向があったからこそ、現在の沖縄があるのではないかと感じる。

今回の訪問でもやはり「挑戦」を感じた。県内での勉強会や研修会、県外への視察の多さに驚いた。10年前と同じように、視察する中からヒントを得て、沖縄に適したスタイルを確立し先へ進もうとする姿勢は健在であった。ただし、挑戦ではなくなり、ルーティン化された実践となっている事実が大きな違いである。

さらに、「挑戦」は「斬新性」へと変化していた。就労支援事業所にはなんとなく暗いイメージがある。そのイメージの脱却と利用する人の前向きな姿勢を一つの目的としたスタイリッシュな建物と内装や事務用品を備えた事業所、精神疾患のある人が漁師として働く事業所、特産物のマンゴーや島とうがらしを栽培、販売する企業（従業員のほとんどが障がいのある人）、など「斬新的」なスタイルが次々と出てきているという。

そのうちの一つである焼き肉店「焼き肉パラダイス キングコング」の専務取締役である仲地宗之さんのお話が印象的だった。「キングコング」は、正式な訪問先には入っていない。というのも、8月上旬の訪問で聞き残しがあり消化不良だった私は、2週間の間を置いて再度押しかけ訪問を実行した。その時に訪問した先の一つである。これまで多くの事業所や企業を訪問した際、主催者や経営者の視点が、障がいのある利用者や従業員に注がれていると感じてきた。しかし、仲地さんは「お客様」がすべてであり、障がいのあるなしに関わらず、従業員全員が「お客様」の方を向くことが重要であると言われた。もちろん、飲食サービス業であるから当然と言えば当然のことかもしれないが、「お客様」の方を向くことは、従業員全員が同じ方を向く、同じ目的を持つことになり、それができた時に従業員から障がいの有無への意識が消失するということを話してくださった。障がいのない従業員が、障がいのある従業員をサポートすることを仕事のひとつと考えると、障がいのない従業員には「お客様」の方を向くことに加え新たな仕事加わる。そうなると、障がいのある人もない人も気持ちよく働けなくなり、結果として「お客様」の方だけを向くことはできない。しかし、障がいのあるなしではなく、各従業員が「お客様」の方を向く「向き方」を考えれば、従業員は並列な位置にある従業員となる。仲地さんは、障がいがあるがなかろうが、それぞれが個性や特性を持っており、「お客様」に喜んでいただくために、それをどう生かすかであると語ってくださった。具体的な例をいくつかご紹介

いただいたが、それについてはまた改めて報告したいと思う。

躍動感

今回の訪問では、新たな印象として「躍動感」が加わった。

上述したような斬新的な取組を始めているのは、30歳代の若い世代の人たちである。誰もが、いくつ体があるのだろうかと疑うほど精力的に動いている。しかし、若者だけではない。60歳後半にさしかかる、この道40年以上の人たちが、丁寧に大胆に、微妙なバランスを取りながら動いている。ここでもまた、大先輩の背中を見ながら、先駆者に追いつくのではなく超えようとする姿が見られた。さらに、この「躍動感」は、沖縄本島だけでなく、石垣島で活動する事業者にも感じられた。

周知の通り、沖縄は広範囲であり、沖縄本島から離島への移動手段は船か飛行機であるが、本島、離島を問わず、関係する人たちとのネットワークの緊密さと連携の強さが躍動的に映る要因かもしれない。何より、飛び跳ねるように、躍るように動く彼らには、「使命感」や「悲壮感」というものが全くと言っていいほど感じられない。そのことこそが、躍動感を生む根源だと感じた。彼らは皆、「超」がつく多忙ぶりにも関わらず、楽しげであり、「先へ、先へ」という勢いが止まらない様子であった。福祉関係の仕事をしている人の中には、使命感を全面に押し出す人、行政への批判を繰り返す人、住民の無理解を嘆く人が少なからず存在する。延々と繰り返されるそのような言葉は、周囲をさらに疲弊させ、そこからは何も生まれず、負の連鎖だけが続く。今回の訪問では、そのようなことが発せられることは一度もなく、どこまでも前向きな言葉だけが発せられたことから「躍動感」を感じずにはいられなかった。これも二度目の訪問時のことであるが、頭から離れない、那覇市の一般社団法人「ハーネス」理事の永山盛秀氏の言葉を紹介したい。「ピンチとチャンスは紙一重。チャンスはピンチを装ってやって来る。ピンチを拾わないとチャンスは訪れない。チャンスを活かさないからピンチになる」である。すなわち、ピンチはピンチではなく、ピンチはチャンスとなる絶好の機会であるということである。この言葉だけを聞いていたら、ポカンと口が開いたままになったかもしれないが、それを実践してきた永山氏からの響きは重みがあった。

最後に

2006年10月に生活拠点としては沖縄を離れたが、年に数回足を運んできた。最初の数年は、働いていた頃の視点も持ちながら訪れていたように思うが、ここ数年はそのような視点を持って見たことがなかった。北海道に続く訪問地に沖縄をと考えたが、多少の不安もあった。私の中で説明できる沖縄は10年前で止まっていることに気づき、あり様が一変しているかもしれないと思ったからである。しかし、前述したように、私自身には10年前との変化があるならそれを感じたいという欲求があった。そこで、迷いつつ、厚かましくもリクエストさせていただき、浜渦先生のご好意で実現の運びとなった。

「後進性」を感じられなくなった沖縄、「挑戦」し続ける沖縄、「躍動感」を備えた沖縄を感じる事ができた。また、「人」についても考えることが多かった。一見、穏やかそうに見える人たちの強さを感じた。どの事業所、企業においても、過剰な使命感や気負い、周囲と自らを比較し、隣の芝を青く見てしまう姿がないことに心地よさとさらなる強さを感じた。さらに、誰からも「支援」や「サポート」という言葉を聞かなかったことも、私には居心地のよい空気と時間であった。「当たり前」のことを当たり前にする。困っている人がいたら、どうしたの？ と尋ねる。仕事がなく、うちで雇える状態なら障がいがあるうがなかろうか雇う。こんなん、支援とは呼ばない。当たり前」と話された永山氏の言葉に非常に共感し、何度も思い返している。そのことについては、別の機会に報告したいと思う。

訪問先である「ウェーブ」、「ハーネス」、「ふれあいセンター」、「スオウの木」、「ゆにば石垣」、「キングコング」の皆様、この機会を与えてくださった浜渦辰二教授に感謝申し上げます。